

郷土室だより

切絵図考証 七

安藤 菊二

蛸殻町 (続)

前記蛸殻町の酒井下野守、本多肥後守、奥山采女の三屋敷は、元治元年九月、鶴舞藩井上河内守がこれを拜領して上屋敷とした。『江戸藩邸沿革』鶴舞藩井上家の条に、次のように記してある。

一、上屋敷、蛸殻町

旧時の蛸殻町二丁目は、現在は人形町一丁目と二丁目の北半地域に当る。

第10 蛸殻町二丁目

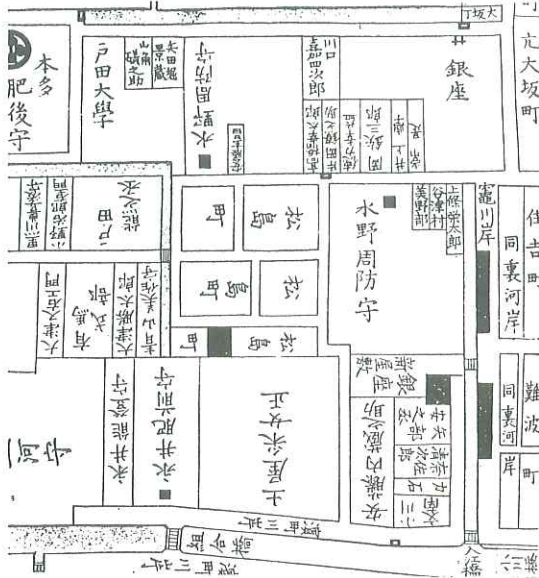
拜領、元治元年九月、坪数四千六百廿坪余。御沙汰留、元治元年九月大名小路屋敷御用ニ付家作共可被差上候。浜町蛸殻町酒井下野守本多肥後守上ヶ地被下。家作無之ニ付、為三手当三金五千兩被下之。井上河内守。

屋敷書抜、元治元年九月十三日、酒井下野守本多肥後守奥山采女上ヶ地、蛸殻町四千六百廿坪余、井上河内守。(市籍編四九一六二九頁)

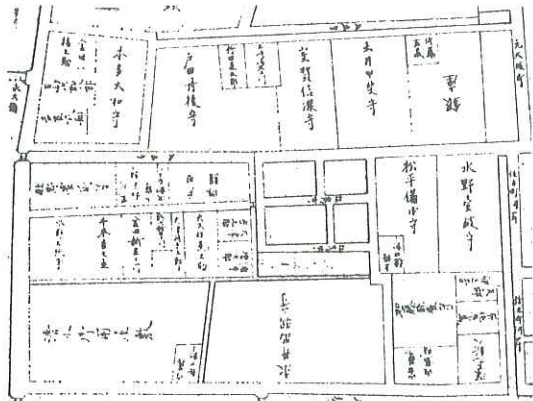
切絵図には、銀座や水野周防守、銀座新屋敷、安藤内蔵之助ほか幕府諸士の名が記されている。以下に知りえたことを記そう。

銀座 慶長以来の古い由緒を持つ京橋南、新而替町にあった銀座は、寛政一二年に突如としてお取潰しに逢い蛸殻町に移された。

銀座移転の原因について、従来ややともすれば、座人の不正が発覚して厳しいお咎めを受け、お取潰しになったもののように言われてきたが、これは誤りであった。すでに早く幸田成友博士が「大黒常是考」で指摘されたように、また田谷博



尾張屋版「日本橋北内神田両国浜町明細絵図」安政6年(1859年)



「御府内沿革図書日本橋之部」文化5年(1808年)

吉氏が『近世銀座の研究』で、詳細な検証をされたように、銀吹立御用の減少につれ、五二軒七八人もの座人を抱えていた銀座は、困窮におち入り幕府に対して多額の上納滞銀を生じたため、「畢竟取締り不行届難儀に及び候儀、

当人不將の次第」という罪案でお取潰しに遇ったのである。幕府は銀座の役所規模を縮小し、経費の削減に向って大なたを振り、旧座人全部を解任し、役所は蛸殻町に移し、一五人の座人を新たに任じたのであった。この時点から、銀貨の铸造は銀座の特権事業ではなくなり、幕府御勘定方の監督下に行なわれることに改められたのだった。

銀座引替地を蛸殻町において与える旨の申渡しは、『徳川禁令考』に寛政十二年申十一月廿二日

銀座引替地之事

伊豆守殿御渡 御勘定奉行え

銀座引替地之儀、蛸殻町酒井雅樂頭土地千八百七拾壹坪余之所ニ而被_レ仰付_レ候間、得_ニ其意_ニ可_レ取計_ニ候。尤、御普請奉行_ニ可_レ被_レ詔候。

と見えており、(田谷博吉氏「近世銀座の研究」三七〇頁) 蛸殻町銀座の構造は「大黒常安覚書」に、

蛸殻町にて屋敷拜領仕候は、寛政十二年十二月廿六日、表間口拾五間、裏間口同断、裏行三拾五間五尺、此坪數五百三拾七坪五合

とあり、常是役所は従前と大差ないものだったようである。(同前書、三七二頁) 蛸殻町銀座の後日譚としては、鹿島万兵衛氏の『江戸の夕栄』に次の記述がある。

元大阪町十三番地と蛸殻町二丁目十

四番地一帯は旧銀座なりし。人形町南谷陳列所の所に銀座の表門あり、角の瀬戸物屋の所が常是なり。銀座裏門は今の東華学校に向ひ、西面して建てられし。其内に一分銀や一朱銀を作られし工場ありしなり。當時は铸造は皆座にての請負にて、御用の多く出るは座人の利益なるが、老中や勘定奉行に運動する資用も少なからざりしが如し。…維新後、銀座御廃止に付、旧年寄役始め重役等へ

铸造所跡の土砂を賜りしゆゑ、裏門外(堀)堀の下水出口下の土迄も掘取り_よ洵げ、含有しある銀も少なからざりし。凡三ヶ年に亘りて採用し、相当収益ありしと聞けり。銀座役所の跡は一時通商司為替会社を置き、金廿五兩の兌換券も発行、一部銀行の業務を取られたり。この総頭取は三井・小野其他豪家の主人が帯刀にて出勤せられたり。

近藤守重の擁書城

『御府内沿革圖書』を検すると、文化五年図に、後に銀座の用地となる土地の西方中央部に蝦夷地探険家として知られる近藤守重の名が記されている。

守重がこの地を拜領したのは文化四年二月で、『相對替御書附書抜』に

植村駿河守拜領屋敷

蛸殻町八百九拾七坪之内三百五拾七坪
小普請組近藤重藏(市街篇三三六四八頁)

と見える。

近藤重藏、名は守重、字は子厚、幼字は吉藏、長じて重藏と改めた。正齋と号し、晩年昇天真人と号した。

守重は敏慧の質で、七才の時にすでに孝経を暗唱したといわれ、神童をもって称されていた。寛政二年七月父致仕の跡を承けて家督を継いで御先手与力となり、翌年松前蝦夷地御用取扱いを命ぜられて、御使番大河内善兵衛の手に属して松前にいたり、蝦夷地では最上徳内とともに国後にまで足を延しつづさに前人未踏の地を探索して帰った。探険家としての守重の業績はさぶる著聞している。文化五年(一八〇八)二月御書物奉行に榮転し、文政二年(一八一九)二月大坂弓矢奉行に遷るまでまる一〇年間蛸殻町に住んでいた。御書物奉行時代の守重の勉勵は、

すさまじいくらいで、楓山文庫を整理して御本日記・右文故事・好書故事・正齋書籍考などの大部の著述を完成、書誌学上に没すべからざる業績を遺した。

守重はその室に号して擁書城と称していた。この邸宅内部のようすは、森潤三郎氏の、『紅葉山文庫と御書物奉

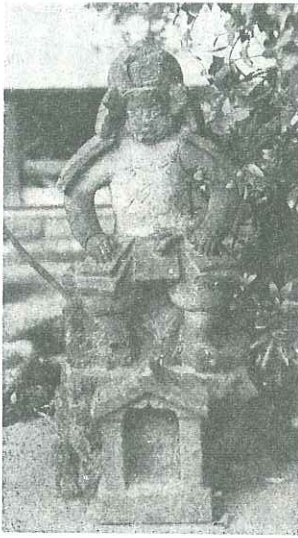


近藤守重の蔵書印(『蔵書印譜』(三村清三郎・横尾勇之助共著)による)

行』に引いた『守信聞書』に詳しい。本邸は江戸大川端辺蛸殻町とて、小網町松嶋町のあいだにて元大阪町まがりと呼べり。若年寄堀田撰津侯外邸方六十間ばかり、井戸は方十町には唯二軒の名水なり。公にては小身者にはあまり広大なりとて、三百五十坪を賜り、残り取あげ銀座製造所になされたり。

美々しき家宅も類焼せしかば、町家の土蔵造りを求めたり。座敷は二十八畳に方一間前二尺床棚つき、二階座敷も二十四畳しき、麻の間四畳棚あり。

柱は樺方一尺二寸、棟は四間とをし木口二尺ばかりこれも樺なり。入費一千三十金とぞ。もとの門は冠木門なりしが長屋造りの門とせり。長さ十間横二間にて、表門に侍小者の部屋もあり。玄関中の口、常口、使者間、茶の間、炊屋、女部屋、浴室等にて二十坪余あり。土蔵三間二間、別宅四間半に二間椽つき也。築山泉水あづまやあり。(同書、四五五六頁)



北区滝野川二丁目正受院にある「近藤重蔵の石像」
(写真は北区社会教育課提供)

同書はまた、蜂屋茂橘の『権の実筆』
第一〇編上所収の次の記事をも附載し
ている。

近藤重蔵名守重御書物奉行の時、大
坂町のほとり今銀座住居に擁書城とい
ふ書斎をたてたり。其ありさま大き
く長き土蔵造りにて、二階には書物
を多くたくはへて擁書城の額をかけ
下屋には武器を多くならべたり。床
の間いと大きし。二階のも下屋のも
三間ばかり也。又二階の天井は蝦夷
より来りし大きな松の皮也。此二
階よりのぞめば、佃沖の帆ばしに見
えたりと吉田九市その頃まのあたり
見たりとてかたられたり。いかにも
大造成る普請なりとぞ。又右の家作
の入用は殿中にて諸侯へ直に無心を
云てもらひたる金子にてかかる管作
せしとぞ。(同書、五一頁)

とあり。小野則秋氏の『日本文庫史』
には、更に、鈴木白藤の『夢蕉録』に

擁書城席を並ぶる事五十畳余、四間
尺余の棟けやぎにて、柱は皆々尺角
也。広き事一望する也。二階は少く
狭く二十六七畳を敷くべし。二階四
方張附、蝦夷地、天草、エトロフ、
チャノノボリ、イルコウッカ、石
狩、天塩川の図をゑがく。□の写真
の唐紙、足利時代の卓、亀井六郎が
所持せると同物なる、蝦夷にて得し
笈をかざる。経筒は□年中の物、
マガ玉五十余、其余珍玩不暇始、略
不書、天井龍をすりたる好みの張つ
け、床の間は鹿と櫻花とをすりたる
好みの張付也。二階の床二間に七八
尺もあらん。山の松の板一枚にて張
りたる実に壯観驚目、予と小山二子
睜目して茫然たり。

とある記事を附載している。その気宇
の豪快なるを覗うに足る。もつとも、
豪傑だっただけに、世評は概して香ば
しくない。喜多村篤庭などは『聞已任
』に、か
なり悪し
様に書い
ている。
…近藤
氏の事
よくも
知らぬ
ども、

『に、か
なり悪し
様に書い
ている。
…近藤
氏の事
よくも
知らぬ
ども、

何与力にか、青雲を志し、与力をあ
げて終に立身したり。旧宅は大坂町
金銀座の西の方也。金銀図録を著す
ころ、彫刻摺立などは尚左堂俊満請
負たり。それ故俊満も頼れて古金所
藏人より借写して写しける時、其古
金を典物などにして、俊満も迷惑し
たる由。其外手間料請取事に付て、
とり合ければ、切捨んと近藤がいひ
しを、俊満ハ事ともせず、冷笑ひて
有しに事済たりと語りぬ。其後大坂
在番に登る時、屋敷を土生玄碩に傳
たり。さて大坂ニテ御城内の土を売
たる事に依て江戸ニ召れ、御吟味あ
つて、御役被召放一小普請入被仰
付。此時屋敷なき故、玄碩を馮み
長屋の端をかりて居しが、やがて板
囲を作り、玄碩が家の這入口に障り
ければ其由いへど、ふつに取合ず。
土生怒て訴へんとせしを、石坂宗哲
諫めけるは、足下は今出世の身也。
是を争論する時は却て立身の為互し
からず。此家打捨ても足下は困るべ
きにもあらずといへるに、玄碩も然
りとして、夫より二葉町に移り住め
りと石坂氏が咄也。然れば近藤又こ
こを銀座に傳て、地所ハ目黒との代
地とせしなるべし。(『未刊隨筆百種』
巻二一、一六九一七〇頁)

何と力にか、青雲を志し、与力をあ
げて終に立身したり。旧宅は大坂町
金銀座の西の方也。金銀図録を著す
ころ、彫刻摺立などは尚左堂俊満請
負たり。それ故俊満も頼れて古金所
藏人より借写して写しける時、其古
金を典物などにして、俊満も迷惑し
たる由。其外手間料請取事に付て、
とり合ければ、切捨んと近藤がいひ
しを、俊満ハ事ともせず、冷笑ひて
有しに事済たりと語りぬ。其後大坂
在番に登る時、屋敷を土生玄碩に傳
たり。さて大坂ニテ御城内の土を売
たる事に依て江戸ニ召れ、御吟味あ
つて、御役被召放一小普請入被仰
付。此時屋敷なき故、玄碩を馮み
長屋の端をかりて居しが、やがて板
囲を作り、玄碩が家の這入口に障り
ければ其由いへど、ふつに取合ず。
土生怒て訴へんとせしを、石坂宗哲
諫めけるは、足下は今出世の身也。
是を争論する時は却て立身の為互し
からず。此家打捨ても足下は困るべ
きにもあらずといへるに、玄碩も然
りとして、夫より二葉町に移り住め
りと石坂氏が咄也。然れば近藤又こ
こを銀座に傳て、地所ハ目黒との代
地とせしなるべし。(『未刊隨筆百種』
巻二一、一六九一七〇頁)

○井上学、岡鉄三郎(未考)

○徳力幸益

『安政六年武鑑』に「表御坊主衆、
はま丁かきがら丁」と見える。

○片岡鐘之助

『文久二年武鑑』に「御普請支配世
話取扱、はま丁かきがら丁」

○高橋幸太郎

『文久二年武鑑』に「高橋小太郎、
那奉行、三百石高」と見える。小太
郎はこの幸太郎のことか。

○安藤玄昌(未考)

○水野周防守

上野市原郡鶴牧、一万五千石の大名。
上屋敷は呉服橋内、中屋敷は蛸殻町に
あった。『藩邸沿革』に

一、中屋敷 蛸殻町
相對替。元文五年八月十五日。相對
續替延享三年二月廿三日。切坪相對
替、天明五年三月廿六日、相對替續
替文化十年四月廿六日。相對替圍込
文化十二年七月十二日。上地万延元
年六月朔日。坪敷五千六百七拾壹坪
余。(下略) (市街篇四九一六三七頁)

書上に見られるように、上地後、菊

間藩水野家の拝領屋敷となった。『藩邸沿革』に、

○元沼津菊間藩、子爵水野家、五万石。

下屋敷、蛸殻町

拝領、万延元年七月及九月、坪数五千六百七拾壹坪余。

屋敷書抜、万延元年七月十日水野周

防守上地之内、浜町蛸殻町四千四百

七拾壹坪余。但、小石川中屋敷差上

候代地ニ渡、水野出羽守。

同書、万延元年九月十六日、石谷因

幡守上地、浜町蛸殻町千坪、但、芝

二本榎下屋敷差上候代地ニ渡、水野

出羽守添地。(市街篇四九一八五頁)

○銀座新屋敷

かきがら町銀座の添屋敷で、文政一二年(一八二九)に賜与された。『屋敷

敷預絵図証文』に、

浜町 銀座添地坪数七百四十三坪。

東北 寄合安藤内蔵之助

西南 水野彦岐守 東南 道

西北 小普請組長井五右エ門支配

矢部七左エ門

東北 西南 四十三間式尺

東南 西北 十七間式尺

浜町石河美濃守拝領下屋敷六百六拾

九坪並永御預地七拾四坪。銀座添地

ニ被ニ仰付候ニ付、被成御渡之、四

方間敷、御絵図之面、御定杭之通、

相違無御座、請取申候。為後日二仍如件。

御勘定 深山宇平太 印

御勘定 佐藤源五郎 印

文政十二丑年七月二十八日

(中略)

浜町 銀座添地境下水幅九尺

東北、銀座添地 西南、水野彦岐守

東南、道 西北、下水

浜町石川美濃守様下屋敷と、水野彦

岐守屋敷境ニ大下水有之候処、右美

濃守様御下屋敷、今度銀座添地ニ被

ニ仰付、御引渡ニ相成候ニ付、右下

水之儀は、是迄之通り、御絵図面朱

引之通、下水中央彦岐守持場境ニ相

心得候様被ニ仰渡、奉畏候。為後

日ニ仍如件。

文政十二丑年七月廿六日

(市街篇三七一三八頁)

と見え、元石河美濃守の拝領下屋敷跡

地を賜与されたこと、西南水野彦岐守

との境には幅九尺の大下水があったこ

とが知られる。

この地の明治になってからの地番は

蛸殻町二ノ八。明治六年取払いとなっ

た芝居小屋の内、中島座は六年二月二

一日、この銀座新屋敷跡の一部に移転

し来り、四月二一日に開場している。

○浜町入堀と難波町河岸の接点に近い

武家地は、古くは関伊織の屋敷のあつた所。元禄八年三月一八日日本橋浜町

に定火消鉄砲組が設けられた時、関伊

織久盛の屋敷が火消御役屋舗になった

。坪数三九〇坪余、東六二間三尺、

西六三間、南六三間、北六一間三尺。

ほぼ一町四方の屋敷地であった。

切絵図に見られる、小川文南・力石

・矢部安之丞は未考。

○奈佐清次郎

御祐筆である。

文久二年武鑑に「二百表高、へっつ

いがし」とあり、『昭徳院殿御実紀』

文久元年二月四日の条に、金式杖

時服式賜与のことが載っている。

○安藤内蔵之助

安政二年武鑑に「御寄合衆五千石」とある。



○前頁に掲げた「近藤重蔵の石像」については「北区史」の記事があるので引用して説明にかえる。

滝野川の正受院本堂に向って左側にある近藤重蔵の石像は甲冑打扮の高さ三尺位のものである。当時の知識人として探検家として知られた重蔵が蝦夷地調査をおえて帰国後、正受

院の隣の管理者野間正順なる者が、重蔵に土地を分割し、谷文晁に彼はその記念の為下絵をかかせ、これを石像にきざみ、石神井川の川上の岩窟に納めると共に、古書等を正受院におさめ滝野川文庫と称した。(中略)石像は、明治初年に洞窟より出して今の場所に移したと云われている。(編集員)

寄贈資料

佐原六郎先生(慶応大学教授)より「深川新地よりみた佃島」を描いた泥絵が寄贈されました。

この泥絵は縦三三センチ、横四四センチの大きさで、作者・制作年代の記載はありませんが、図柄からみて、江戸時代末期または明治初年に描かれたものということですが。

佐原先生は、佃島に関する貴重な研究『佃島の今昔』の著者で、第六回「東京を語る会」で「佃島の話」と題してお話をお伺いしたこともあります。